

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』（18）

訳 武田将明
Takeda Masaaki

➤ の駆けつけてくれた二人の男については、さらに思い出
➤ すことがある。ひとは名前をジョン・ヘイワードとい
って、¹ 当時、コールマン街のセント・ステイーヴン教区で教
会の下働きをしていた。このころ下働きといえば、墓掘りと死
体を運ぶ者と決まっていた。あの大きな教区で埋葬される死体
のすべてを、この男は墓場に運んだ、というか運ぶのを手伝っ
た。死人は厳かなやり方で運ばれていた。その後まともな葬儀
が行われなくなると、死デッド・カートの車と鈴とともに死者の安置された
家へと赴き、そいつを運び出した。死体の多くは屋敷や個室か
ら運ばれた。というのも、ロンドンのどの教区にも増してこの
教区は、数多くの裏通りや路地が延々と続くことで当時も今も
有名で、こういう細い路には馬車の入る余地がないから、運び
役はとても長い路を通って死体を運び出すしかなかったんだ。
こうした裏通りは今も残り、当時を偲ばせる。例えばホワイツ
小路、クロスキー路地、スワン小路、ベル小路、ホワイトホー

ス小路、他にもたくさんある。ここを彼らは一種の手押し車を押して行き、その上に死体を載せると馬車まで運び出した。こんな仕事をこの男はしていたが、いっこうに病魔に冒されることはなく、それどころかさらに二十年以上も生きて、死ぬまですっと教会の使用人を務めていた。おなじころその妻は患者たちの看護人として、この教区で亡くなった多くの人びとを世話していた。正直者として教区の役人から推薦を受けていたんだ。なのにこの妻も決して感染しなかった。

疫病に対して彼が講じた予防法といたら、ただニンニクとヘンルーダを口に含み、煙草をふかすだけだった。² これもまた本人の口から聞いた話だ。妻の方の予防策は酢で髪を洗い、頭に巻いた布にもおなじく酢を振りかけ、いつでも湿らせておくことだった。看病した相手の誰かがまともじゃない悪臭を放

¹ この John Hayward なる人物については、コールマン街のセント・スティーヴン教区における 1673 年の教区会議事録に、教会の使用人として同名の人物の名が見られることを Oxford 版の注釈者であるランダが指摘し、Pickering 版のマランと Penguin 版のウォールもそれを紹介している (Landa 273; Mullan 234; Wall 286-87)。また Norton 版の注釈者バックシャイダーは、フランク・バスティアンの『デフォーの前半生』(Frank Bastian, *Defoe's Early Life*, 27) を引き合いに出しながら、このヘイワードが仕立屋も営んでおり、コールマン街の近所にはデフォーの父が住んでいたことから、デフォーがこの人物を個人的に知っていて、自分の記憶を物語に反映させた可能性を示唆している (Backscheider 74)。ランダによれば、ヘイワードは 1684 年の 10 月 5 日に亡くなったと教会の記録の中にあるので (Landa 273)、ペストの流行 (1665 年) 後、二十年以上生きたという本書の記述は少し誇張しているが、ほぼ正しい。

っていたときは、酢を鼻から吸い込み、頭巾に酢を振りかけ、酢で濡らしたハンカチを口にあてがった。³

ペストは主として貧民のあいだで流行していたけれど、それでもこの貧民がいちばん向こう見ずで、病魔を恐れず、一種の蛮勇を奮ってあちこちで働いていたことは、ハッキリ言っておかないといけない。蛮勇と呼んだのは、それが宗教にも分別にも基づいていなかったからだ。この人たちはろくに用心もせず、雇ってもらえるならどんな仕事にも身を投じ、どれだけ危険なものでも構わなかった。例えば病人の世話や、閉鎖された家の監視や、感染した人をペスト治療院に運ぶのは彼らだった。さらにやばいのが、死者を墓場に運ぶことだった。

とても愉快な話として語られてきた、あの笛吹きをめぐる言

² ここに挙げられた香草や煙草が、疫病への免疫をつけるものとして実際に推奨されていたことを、ランダとマランが (とりわけ前者は詳細に) 指摘している (Landa 273-74; Mullan 234)。このうちヘンルーダ (Rue) と煙草については、スウィフト『ガリヴァー旅行記』で、すっかり人間嫌いになって馬の国から帰国したガリヴァーが、家族の体臭を嗅がずにすむように (本書のように口ではなく) 鼻に「ヘンルーダかラベンダーか煙草の葉」を詰めている (*Gulliver's Travels*, Oxford UP, 276)。『ロビンソン・クルーソー』にも煙草は登場し、無人島でマラリアと思われる熱病にかかったクルーソーが、煙草の葉を燃やした煙を吸ったり、葉を浸したラム酒を飲むなどして荒療治を試みる場面がある (『ロビンソン・クルーソー』、河出文庫、137-38)。

³ 酢もペスト対策として実際に推奨されていたことが、デフォーの『魂と肉体のために有効なペスト対策』に記されている (Defoe, *Due Preparation for the Plague, As Well for Soul As Body* 86; Mullan 234 で言及)。

い伝えは、⁴ このジョン・ヘイワードの仕事中に、彼の持ち場で起きたことだった。あの話は事実だと、彼はぼくに請け合ってくれた。うわさではこの笛吹きは目が見えなかったとされているけれど、ジョンの話によると、目が見えないわけではないが、愚かで弱々しく、貧しい男だったそうだ。ふつうは夜の十時ごろこの辺を流し歩き、家から家へと笛を吹いて回った。すると町の人びとはこの男をたいていパブに連れていくのだが、そこではみんなが彼を知っていて、飲み物や食べもの、時には小銭もくれた。男はお返しに笛を吹いては歌い、間抜けな調子で話したりして人びとを楽しませ、こうして生計を立てていたんだ。なにしろお話ししたとおりの状況だから、こういう芸を披露するには不都合な時代というしかなかった。それでもこの気の毒な男は相変わらず流して回っていたが、いまにも飢え死にしそうだった。誰かが「元気かい？」と訊ねると、「まだ死の車が迎えにきてくれないんだが、来週には呼んでくれるって約束してるよ」と答えていた。

⁴ ランダによれば、酔っぱらいが誤って埋葬される話は、やはりペストを扱ったデッカー『驚異の年』(Dekker, *The Wonderful Yeare, 1603*)のなかに見られ、その後も様々な形で書かれている(Landa 274)。また、カイアス・ゲイブリエル・シバー(1630-1700)という彫刻家がこの笛吹きの奇蹟の生還を記念した彫像を製作し、トットナムコート街の庭(笛吹きが死の車に積まれたとされる場所の近く)に置かれていたと、バックシャイダーが紹介している(Backscheider 75)。この注釈では言及されていないが、このデンマーク出身の彫刻家は、もちろん俳優・劇作家・桂冠詩人にして、ポープ『ダンシアッド』で愚物の王に祭り上げられたコリー・シバー(1671-1757)の父である。

それはある晩の出来事だった。誰かがこの男に酒を飲ませすぎたのかは分からないけれど、ジョン・ヘイワードが言うには、男は自分の家で酒を飲んじゃいなかったそうだ。でもコールマン街のパブでいつもよりちょっと多く食わせてもらったらしい。腹いっぱい食べるなんてめったにないことで、たぶん長らくごぶさただったろうから、この気の毒な男はある店先の露台にごろんと寝そべり、玄関先ですっかり眠りに落ちてしまった。そこはロンドンの市街地を囲う壁に近い、クリップルゲートに向かう通りだった。するとやってきたのが、この店の脇から入る裏通りにあった家の人たちで、例の馬車が通る前に鳴る鈴の音を聞きつけ、ペストで亡くなった本物の死体を、まさにこの露台に載せ、男の隣りに並べたのだった。こっちの気の毒な男も死んで、近所の誰かが置いていったものと考えたものらしい。

こんなわけで、ジョン・ヘイワードが鈴と馬車と一緒にここを通ると、露台の上に二つの死体があったので、専用の道具をつかってそいつを持ち上げ、馬車に投げこんだ。このあいだずっと笛吹きはすやすや眠っていたんだ。

それから彼らは巡回を続け、どんどん死体を積んでいき、正直者のジョン・ヘイワードの話では、ついに男を荷台のなかでほとんど生き埋めにしてしまった。それでも相変わらず、男は眠りこけていた。とうとう馬車は死体を投げこむ穴の前にやってきた。それはたしかマウントミル⁵ だったはずだ。溜めこんだ憂鬱な荷物をぶちまける用意を整えるために、馬車はしばらく停車するのがふつうだった。それで馬車が停まるとすぐにこの男は目を覚まし、いくらかもがいて死体の山から頭を出し、馬車のなかで起き上がると叫びだした。「おい、ここはどこだ」

荷を捨てる準備をしていた男は、これを聞いて震え上がった。少し時間が空くと、我に返ってジョン・ヘイワードは言った。「なんてこった。まだ息のあるやつがなかにかにいるぞ」そこで別の者が声をかけた。「あんたは何者だ？」男は答えて「おれは惨めな笛吹きさ。ここはどこなんだ？」「どこだって？」とヘイワード。「知らんのか。あんたは死の車に担ぎこまれて、これから埋められるところさ」「でもおれは死んじやいねえよ、そうだろ？」と笛吹き。ここで彼らは少し笑った。でも、ジョンが言っていたけれど、最初は心底震え上がっていたんだ。そこで彼らは気の毒な男を助け降ろし、男はとぼとぼ仕事に向かっていった。たしかうわさ話だと、男は馬車のなかで笛を鳴らして運び役や他の人たちをギョッとさせ、みんな逃げ出したことになっているようだ。しかしジョン・ヘイワードはそんな話をしなかったし、そもそも男が笛を吹いたなんてひとことも言

わなかった。ただこの男が哀れな笛吹きで、いま話したように運び去られたことは、紛れもない事実だと言っている。

(東京大学准教授)

⁵ このマウントミルについて、ランダはオールダーズゲート街とイズリントン通りのあいだを南北に走るゴズウェル街 (Goswell Street) から東に延びる通りと説明している (Landa 295)。しかしピーター・アクロイド『ロンドンの伝記』(Peter Ackroyd, *London: A Biography*, Anchor, 2003) によれば、このゴズウェル街は、今日ではゴズウェル通り (Goswell Road) と呼ばれ、またマウントミルは通りの名ではなく、マウントミルズという地区名のことだという (Ackroyd 204)。このマウントミルズは、ロンドン北方のゴズウェル通りとそこから東に延びるレヴァー街 (Lever Street) とが交差する地点の南側を指すようだ。なお、次の URL でマウントミルズにあったペスト患者を葬る穴の跡地の写真を見ることができる。 <http://www.burial.magic-nation.co.uk/bgstlukesnorth.htm>.